

風はささやく

小川未明

青空文庫

高窓たかまどの障子しょうじの破れ穴やぶあなに、風かぜがあたりと、ブー、ブーといつて、鳴りなりました。もう冬ふゆが近づちかづいていたので、いつも空そらは暗くらかったです。まだ幼年ようねんの彼かれは、この音おとをはるか荒あらい北ほっかい海かいをいく、汽船きせんの笛ふえとも聞ききました。家いえから外そとへ飛とび出だして、独ひとり往おうら来いに立たっている、風かぜが、彼かれの耳みみもとへ、

「明日あしたは、いいことがある。」と、ささやきました。

「そうだ、きつとお父とうさんが、明日あした帰かえっていらつしやるのだ。」
 彼かれは、希望きぼうを持もって、明あかるくその一いち日にちを過すごすのです。

彼かれの生うまれた町まちは、小ちいさな狭せまい町まちでした。火ひの見みやぐらの頂いただきに、風車ふうしやがついていて、風かぜの方ほう向こうを示しめすのであるが、西せい北ほくから

吹くときは、天気がつづいたのであります。空き車の上へ馬子が乗つて、唄などうたい、浜の方へ帰る、ガラ、ガラという、轍の音が、だんだんかすかになる、ぼんやり立つて、聞いている彼の耳もとへ、風は、

「明日は、いいことがある。」と、ささやくのでした。

すると、急に彼の目は、喜びに燃えるのでした。

「そうだ、明日は、お客さまがあるのかも知れない。」

まねに、彼の家へ珍しい客があつて、おもしろい話をしてくれるのを、彼は、どんなにうれしく思つたでしょう。

ある日、彼は、停車場で、美しい女の人を見ました。ようすつきから、この土地の人でなく、旅の人だということがわかりま

した。そして、いいしれぬやさしい顔は、かえって悲しみをさえ感じさせたのです。彼は、その人の顔を忘れることができませんでした。汽車が遠く去つてしまつた後、かぼちやの花の咲く圃に立ち、無限につづく電線の行方を見やりながら、自由に大空を飛んでいるつばめの身を、うらやんだことがありました。

ちようど、そのころ、他国から歸つた、親類のおじさんがありました。一同は、この人のことを道楽者だと、よくいわなかつたけれど、彼には、いつも思いやりのある言葉をかけてくれたし、怒つた顔を見せなかつたので、なんとなく慕わしく思われました。おじさんは、孤独なのが、さびしかつたのでしよう、ときどきマンドリンなど鳴らして、独りで自分をなぐさめていまし

た。このことを知ったときから、彼にも音楽が、なによりか好きなものとなつたのです。

彼の少年時代は、いつしか去りました。そして、小さな町をはなれて、大きな市へ移るころには、彼はもうりっぱに働ける若者でありました。けれど、心に芸術を忘れなかつたのです。

町の中を川が流れていた。橋の畔に食堂がありました。彼はこの家で友だちといつしよに酒を飲んだり、食事をしたのでした。和洋折衷のバラック式で、室内には、大きな鏡がかかつていました。その傍らには、幾つもの並んだ棚が置いてあった。酒と脂のにおいが、周囲の壁や、器物にしみついていた。

て、汚れたガラス窓から射し込む光線が鈍る上に、たばこの煙
 で、いつも空気がどんよりとしていました。たとえ四季おりおり
 の花が、棚の上に活けてあつても、すこしも新鮮な感じを与え
 ず、その色があせて見えた。それとくらべていいように、そこに
 いる女たちは、濃く口紅をつけ、顔に厚く白粉を塗つていた
 けれど、なんとなく若さを失い、疲れているように見えたのです。
 しかるに、彼は、あるとき、ハーモニカで、「故郷の歌」を
 うたいました。目に広々とした、田園を望み、豊穰な穀
 物の間で働く男女の群れを想像し、嬉々として、牛車
 や、馬の後を追う子供らの姿を描いたのであります。

一曲終わると、すすり泣く女の声がありました。翌日この店を

やめて、故郷へ帰った女があります。彼女の故郷が、彼女の歌が、彼女の魂を呼びもどしたのです。

メーデーの日でした。丘の上の新緑が、風に吹かれて、さんさんとした、日の光の中で躍っていました。見わたすと、乳色の雲が、ちょうど牧人の、羊の群れを追うように、町を見おろしながら、飛んでいくのでした。風は、彼の耳もとへ、「明日は、いいことがある。」と、いつものように、希望をささやきました。

彼は、友だちと腕を組み、調子をそろえて、労働歌をうたった。その声の響く間は、美しい数々の幻想が浮かびました。たとえば、百貨店にあるような、赤、青、緑の冷たく透きとお

るさらや、コップなどを製造するガラス工場こうじょうの光景こうけいとか、
 忽こっせん然それが消えると、こんどは、高い煙突えんとつから黒い煙けむりが流れ、
 また幾本いくほんとなく起重機きじゆうきのそびえたつ、大きな鉄工場てつこうじょうが現
 れるのでした。そして、歌がやむとともに、それらの形かたちと影かげもど
 こへか没ぼつしてしまいました。彼かれが、またハーモニカで、インタ―
 ナショナルをうたつたときには、洋々ようようたる海原うなばらが前面ぜんめんへ盛も
 り上がりありました。そして、汽船きせんの過ぎた後あとには、しばらく白浪しらなみ
 があわだち、それも静しずまると、海草かいそうがなよなよと、緑色みどりいろの
 旗はたのごとくなごやかにゆれるのであります。

彼の青年時代かれせいねんじだいは、夢も多おほかつたかわりに、また、反面はんめんあま
 りに醜みにくかつた現実げんじつのために、焦燥しょうそうと苦悶くもんをきわめたのです。

目で見た、一つの例をとれば、ここに毎朝出勤する紳士
 があります。その人は、氣むずかしく、家庭では、なにか氣にい
 らぬことでもあれば、罪のない細君をしかり、子供をなぐつた
 りしたのに、出社して、上役の前では、まったく別人の
 ごとく、頭をぺこぺこして、愛想がよかつたのです。しかるに、
 上役は、冷然として、皮肉な目つきで、その男を見下して、
 命令します。この場合、だれが聞いても無理と思われような
 ことでも、男は、服従しなければなりません。風彩
 からいえば、その男のほうが、上役よりりっぱでした。頭髪
 をきれいに分け、はいているくつも出かける前に、哀れな細君
 が念をいれてみがいたので、ぴかぴかと光っています。まだ社で

は、それでもいいが、男は、ときどき上役の家庭へも、ごきげんを伺いに出なければなりません。我が家では、妻や子供らに対して、嚴格過ぎるといつてもいいのに、上役の家では、やんちや坊主を晴れ着の脊中へ乗せて、馬替わりとなつて歩きます。これは、そうした社会の話であるが、音楽家や、ほかの芸術家も、また同じでした。ある美貌の音楽家は、指に宝石をかがやかせ、すましこんで、ステージに立ち、たとえ聴衆を睥睨しながら歌つても、蔭では、権力のあるものや、金力あるもののめかけであつたり、男どもには、幫間に類するやからが少なくなかつたのでした。

こうした社会を見、こうした現実を知るとき、彼は、余の

人のごとく、平然たることができなかつたのです。ただ聰明
 をかいたがため、階級に対しては、組織ある鬭争でなけれ
 ばならぬのを、一途に身をもつて、憎いと思う対象にぶつか
 りました。それ故に、結局へとへとになつて、揚句は酒場で
 泥酔し、わずかに鬱を晴らしたのです。彼は、芸術を商
 品に墮落させたやからをも憤りました。街頭へ身をさらし、
 雪まじりの風の吹く中で、バイオリンを弾き、悲痛の唄をうたつ
 て、道ゆく人の足を止めようとしてしました。けれど畢、竟自分を
 慰め、苦痛を忘れさせるものには酒以外ないことを知つたが、
 生まれた日から、今日まで、瞬時も休まず鼓動をつづける心
 臓に触れて、愕然として、彼は、真に自身をあわれむ気が起

こつたのでした。

ほんとうに、ブルジョアに隷属する彼らが、よどんだ沼の中
 につながれた材木であり、縛つたなわもろとも、いつか腐る運
 命にあるなら、彼は、さながら激流の彼方の岸、此方の岩
 わかど角と衝突しながら、漂いいくいかだのごときもので、時代
 の犠牲たることに異いがなかつたのです。

ある日、彼は、若い時分、下宿していたところとお
 ました。橋の畔にあつた食堂は、もうそこになかつた。あの
 ころの娘は、すべてお嫁にいき、母親となつて、生まれた子供
 も、大きくなつたであろう。それだけでなく、あのころの男の子
 は、兵隊にいき、なかには、すでに戦死したものもあるであら

う。こう考かんがえると、彼かれは、歩あるきながら感かんが慨がい無む量りょうなのでした。記憶きおくに残のこる床屋とこやがあつたので入はいりました。もちろん主しゅじん人もちがうていれば、内ないぶ部のようすも変かわつていました。それよりも驚おどろいたのは、鏡かがみに映うつつた自じぶん分の姿すがたでありました。頭とうはつ髪はつは、半はん分ぶん白しろく、顔かおには小こじわが寄よつて、当とうねん年の若わか々わかしさが、ままつたく消きえ失うせてしまつたことです。

ふたたび、路ろじょう上じょうへ出でると、風かぜが、耳みみもとで、「みんな流ながれのごとく去さつてしまつた。」と、ささやきました。彼かれは頼たよりなく、さびしく、独ひとりうなずいたのでした。

丘おかへ上あがると、春はるのころは、新しん緑りよくが夢ゆめ見るようように煙けむつた、たくさんの木立こだちは、いつのまにかのこきられて、わわずかしか残のこつてい

なかつた。足もとには、小さな家屋がたてこんで、物干しの洗せんたなかつた。濯くもの物が、夏空なつぞらの下で、風かぜにひるがえり、すこしばかりの空あき地で、子供こどもが、鬼おにごっこをして遊あそんでいました。

ひとり一人ハーモニカを持った、男の子がいました。その子は、鬼おにごっこに加くわわらず、ぼんやり立たつていたので、彼かれは、そばへいき、ハーモニカを借かりて、いまなお子供こどもたちに親したまれる、ちようちよう、ちようちよう、菜なの花はなにとまれを吹ふいて、聞きかせたのです。すると、子供こどもたちは、鬼おにごっこをやめて、

「おじさんは、うまいんだなあ。」と、たちまち彼かれを取り巻まきました。いま子供こどもらの目めは、いずれも遠とおい、美うつくしいものを憧あこがれているのです。彼かれは、その姿すがたのうちに、少年しょうねん時代の自分じぶんを見みいだ

しました。そして、あの、なつかしい親類のおじさんを。

「おじさんは、どこからきたの？」と、子供が、ききました。

「あつちから、君たちとお友だちになりにきたのだよ。」と、彼は、答えました。

「ほんとう、ここは涼しいよ。そんなら、明日から、木の下で、おもしろいお話をしてくれたり、ハーモニカを吹いて聞かしてくれよ。」

「いいとも。」

このとき、風は、頭の上で、さわやかにささやきました。

「明日から、いいことがある。」

彼の胸に、かすかながら、ふたたび希望がよみがえったのである。

ります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

初出：「人民戦線」

1946（昭和21）年5月号

※表題は底本では、「風《かぜ》はささやく」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風はささやく

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>